

## 出張報告書

小松久恵

### ○出張期間

平成23年3月25日～3月29日

### ○出張の目的

本研究は、「国家の輪郭と越境」を検討する上で、地域大国内のマイノリティや、国境を越えて移動する人々の動態を考察することを掲げている。報告者は「インド」という国家の輪郭がどのように成立し、またそれがどのように変容していくのか、「インド」表象に着目し考察することを試みている。今回の出張は、こういった作業が、ではアジアの別の国ではどのように行われているのか、また行われようとするのか、という点を検討することを目的とした。具体的には、タイ国のインド研究センターを訪問し、同センターにおける研究体制や、将来的な相互研究の展望についてスラット・ホラチャイクル准教授と意見交換を行った。ホラチャイクル准教授は、2010年12月に大阪で開催された国際シンポジウムのパネリストであり、同センター開設の中心人物でもある。氏との交流ゆえに、今般のバンコク訪問を企画、そして3月26日、あるいは28日にセンターのオープニング・セレモニーが行われる、とのことであったのでその期日に合わせて日程を決定した（実際は主賓であるタイ国王女とインド側の都合により延期となった）。

### ○インドセンター視察報告

同センターは、国立チュラロンコーン大学に併設され、タイ国初のインド研究センターとなる。同大学はバンコク市内、それも駅前大きなショッピングモールが立ち並ぶ商業地に隣接し、広大な敷地を有する。聞くところによると、駅周辺の土地の多くを大学が所有しており、「the richest university」との説明にも大いに納得がいった。シャトルバスが走る大学構内は、都心とは思えないほど緑が多くゆったりとしたつくりで、お堂のような建物があちこちにみられた。



立派な門が何カ所にもある



キャンパスマップ



ホラチャイクル准教授が所属する  
政治学部



政治学部横の御堂



整備された構内



学部が所有する移動図書館

インドセンターは形式上ではすでにオープンしているが、実際に国から予算がおりるのは 2011 年 10 月からであり、今のところは大学内の予算が運営資金となっている。現在のオフィスは仮の宿であり、2 年以内の完成を目標に 18 階建て（予定）のビルが建築中である。



仮オフィスが入るフロアで  
ホラチャイクル准教授



仮オフィス内



センター予定地

同センターの運営資金には、国家予算以外にもタイでのインド研究の発展を期待する様々なグループから多額の寄付が見込まれている。その内訳は①インド人（ビルラ、タタ、ミッタル、インドラ等タイに進出している巨大ビジネスグループが中心）②インド系タイ人③その他（中華系タイ人、タイ人）となり、寄付の割合からみると、多額な順に①、③、②となるようだ。さらに、ICCR（インド文化関係評議会）が 2012 年 6 月から 3 年間、インド人研究者 6 名の派遣を決定している。政治、経済、社会、歴史、IT、芸術など様々な分野の専門家がそれぞれ半年ずつ講義を担当するのに加えて、ヒンディー語教育の専門家も一名派遣される。講義は大学の学生や教授のみならず、広く一般にも無料で公開される（ヒンディー語クラスのみ有料）。また、年に一度インドへのスタディーツアーも計画されており、タイ航空には一年中センター用に最低 8 席がリザーブされているという。このように同センターには、インド、タイ両国の政府間のみならず、様々な方面からの支援、バックアップが約束されており、その発展に大きな期待が寄せられていることが感じられた。

同センター立ち上げの中心人物であるホラチャイクル准教授は、タイにおけるインドならびにインド人観（その多くは偏見に満ちているという）を改善すること、そしてこれまで国内に存在しなかった、インドに関する広い興味関心を普及させることを常に意識している。准教授はまた、これまで英米諸国の研究成果の受け手であった

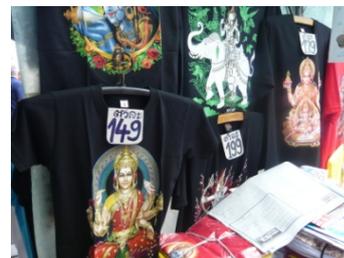
アジア諸国からの新しい視点、研究の可能性に注目する。アジアはこの先、いかにしてより相互協力、連携を深めるのか。インドにその答えがあるのではないか ('Asian researchers had long been just recipient of views by the Westerns. But, how have Asian researchers themselves seen India? And also how can Asians become more united? India must have the answer.')

と准教授は熱く語った。非常に興味深く、報告者自身も大きくなすいた点である。今後、研究を進めていく一つの在り方を共有したように思う。意気投合した准教授と共に、2012年の夏(6月~8月)をめぐりに開催予定の国際会議について意見交換を行った。"Understanding new India via novels, music and film"という仮のタイトルで企画中のこの会議は、いわゆるポップカルチャーを通じて、変わりゆくインドを(准教授は'adventurous'という単語を用いた)アジア研究者の視点で提示しようという試みである。韓国、日本、ベトナムなどのアジア諸国のインド研究者の発表に、インド人研究者からのコメントを予定している。今後、准教授と共に開催に向けて話し合いを続ける予定であるが、コンファレンスの開催は、これまで意識してこなかったアジアの他の国の研究者によるインド研究を学ぶ、またとない好機となるにちがいない。英米研究者とは異なる、そして「我々」に共通する視点は存在するのだろうか。インドを表象するという行為を通して「我々」が表象される機会を、心待ちにしている。

#### ○インド系コミュニティ視察報告

インドセンター訪問の合間を縫って、バンコクのインド系コミュニティを訪れた。時間の制限もあり、①バンコクのリトル・インディアと目されるパーフラット市場周辺②同市場に隣接するグルドゥワラー(シク寺院)③街の中心部に位置するヒンドゥー寺院④その向かいにあるモスク、といったわずかな場所しか見学することが叶わなかった。①はバンコクにおけるシク教徒の集住地区だということもあり、多くのシク教徒が営む小売店(繊維関連)を目にした。また②は、東南アジア最大のシク教寺院、かつ1933年に建設されたバンコク最古のグルドゥワラーである。非常に壮麗な寺院であり、更に結婚式が行われる日に訪問したせいか、寺院には想像以上に多数のシク教徒が集っていた。ロンドン郊外のサウスオールで訪れたシク寺院で目にしたランガル(寺院で施される食事)よりも、はるかに豪華な食事内容であったのも、結婚式当日だったためだろうか。寺院に集う人々の服装や立ち居振る舞いからも、比較的裕福な層が大半ではないかと想像された。

【①パーフラット市場並びにその周辺】



表通りに面した小売店には、ごくわずかのインド系しか見られない。店番をしていたインド系女性に尋ねると、市場の奥にインド系による店が集まっていると教えられた。



市場の中まで進むと、小さな間口の布地屋がひしめき合い、多くをインド系が占めていた。



市場の中には布地以外にもインド系の雑貨が売られている。客は必ずしもインド系に限らない。



市場の向かいにある中規模ショッピングセンターにも、インド系雑貨の店がいくつも入っている。

【②グルドゥワラー (シュリー・グル・シン・サバー)】



市場に密接して、壮麗な寺院がそびえたつ。入口は周囲の住民の休憩場所にもなっていた。



入ってすぐのスペースには、グルドゥワラー主催の講座や行事の紹介等が掲示されている。



大理石をふんだんに使用した、ゆったりとした造り。



にぎわう食堂。英国、インドとは異なり、床に並んで食事をする姿が見られなかった。

【③ヒンドゥー寺院（マハー・ウマー・テウィー／シュリー・マハー・マリアンマン寺院）】

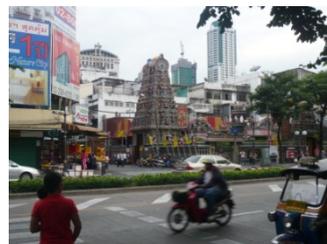
バンコクに建つヒンドゥー寺院の中で、最も古い歴史をもつ（1840年代建設）。南インド特有のスタイルで建立されたこの寺院は、街の中心部シーロム通りに面している。境内の写真撮影は禁止されていたので、外からのみの写真となるが、通りからでも南インド特有のゴープラムの色鮮やかさが目立っている。ヒンドゥー寺院ではあるが、参拝者のほとんどがタイ系、中華系であり、インド系は数えるほどしか目につかなかった。入口にはタイのお寺と同じように、放生の功德をつむための鳥売りがみられた。文化がいかに混じり合い、変容していったのか、非常に興味深い。ホラチャイクル准教授に伺ったところ、バンコクのヒンドゥー教徒の大半は、前出のグルドゥワラーそばにあるヒンドゥー・サマージに参拝しているとのこと。次回のバンコク訪問時に案内していただけるとのことなので、その機会を心待ちにしている。



寺院の標識



通りに面した入り口



通りからも目を引く寺院



色鮮やかなゴープラム



門前の鳥売り



お供えの花

【④モスク（ミラスッディーン・モスク）】

バンコク市内にあるモスクの中でも、大きなものは空港と市内を結ぶ高速道路沿いに見られる。今回の滞在ではそれらの見学は叶わなかったため、シーロム通りにある小規模なモスクを訪れた。入口の看板によるとこのモスクは、Manit Hadji Muhamud Maidin 氏の私有モスクであり、維持費は全て氏の個人財産によって賄われているという。門が閉ざされていたため、中に入ることはできず外からの見学となった。



市場を抜けてモスクへ向かう



外からのみ見学可能



入口の看板にアラビア文字は見られない

今般の出張は、チュラロンコーン大学のインド研究センター訪問並びに同センターの研究者との意見交換を主要目的とした。アジアにおけるインド研究の展望について意見を交わし、更には2012年夏の国際会議という具体的な目標に向けて、相互協力を確認しあうことができた。非常に大きな収穫であったと思う。また、これまで意識してこなかったタイにおけるインド系コミュニティについても、今回、そのごく一部にであったが触れることができた。今後は、同コミュニティが例えば文学作品においてどのように表象されているのか、また同コミュニティに出自をもつ作家が存在するかどうか、するとすれば彼（女）の作品世界はどのようなものなのか、同センターとの連携を通しながら調査してみたい。さらにはイギリスにおけるインド系コミュニティとの比較も試みながら、さらに研究を深めていきたい。